
2020 年 9 月

真宗大谷派 京都教区 教化広報誌

教区だより

特別号

Vol.5

「今、この時に、親鸞聖人に会う」
「人智と不安」

九州教区長崎組西光寺 ふじい まこと 藤井 眞翔 氏

◎『教区だより』特別号 について

新型コロナウイルスの感染拡大の影響により、『教区だより』は通常の編集体制が取れなくなったため、5月より京都教務所の編集責任により、「特別号」を発行しております。

通常の体制に戻るまでの間、引き続き特別号というかたちで発行してまいりますので、教区の皆様には、ご理解いただきますようお願いいたします。

『教区だより』特別号の発行について

新型コロナウイルスの猛威が世界中を不安に陥れ、私たちの日本社会も計り知れない不安の只中にあります。

これまで「当たり前」にしていたことが当たり前ではなくなった現実に直面し、あらためて考えさせられること、気づかされることも多々あるのではないかと思います。

私たちが当たり前にしてきた「日常」とは、実はどこにも約束されていない奇跡の連続であり、また人間の自我分別が思い描く理想は、常に事実の前に屈服せざるを得ないという道理も教えられます。

いま、私たちは早期の事態終息を深く願いながらも、このような時だからこそ、浄土真実を宗とする宗祖親鸞聖人の教えに身をさらし、聖人の教えに出会い直していくことが大切ではないかと思っています。

このような願いから、京都教務所では「今、この時に、親鸞聖人に遇う」というテーマのもと、『教区だより』特別号を発行してまいります。

京都教区教化委員長 日野 隆文

「今、この時に、親鸞聖人に遇う」

「人智と不安」

九州教区長崎組西光寺 藤井 眞翔

私の事実

新型コロナウイルス感染拡大という事態によって今までの生活が一変しました。あらためてこの事態を仏法聴聞の機縁として、今の生活の中から宗祖の教えに耳を傾け、そのお心を尋ねてみたいと思います。

九十歳を超えたご門徒さんが「これまで密によつて人間関係を築いてきたのに、密を避けると言われてもね…」と寂しそうに仰っていました。言葉の背後にある人生経験の豊かさ、私を深く傾かせました。私自身、個人化が加速する現代社会にあつて、人間関係の煩わしさを感じやすくなっていました。いざ人と人との距離ができてしまうと逆に近さや温もりを求めてしまいます。人は人間関係を煩い厭う一方、その関係性にも飢えて欲してしまうということに気づかされました。一見、矛盾しているようにも見えますが、どちらも私の事実なのだと思います。良くも悪くも人間は、関係存在として常に矛盾を抱えながら関係性に悩み続けるものなのでし

よう。

自身のあり方

仏事も感染拡大防止のために従来の形をとれなくなっていました。多勢の発声を避けるために「正信偈」の同朋唱和を控える。あるいは人との接触の時間を減らすために儀式の省略化を余儀なくされました。その他にも葬儀の場に親族や有縁の方々が集うことも制限されてしまうということもありました。そもそも一つの場所に集まること自体を憂慮してしまうという現状です。本堂のお荘厳を肌身を感じ、ただようお香の薫りに包まれながら、ともに記念仏する場を今は持つことができず、隣の方の息づかいを感じる距離にすることもできません。そういう場が失われていく事態を目の辺りにして、地域のお内仏としての寺院の役割をどのようにして果していくことができるのか。大きな課題も突きつけられました。

法然上人が「現世をすぐべき様は、念仏の申されん様にすぐべし」(『和語燈録』)という言葉を残しています。この言葉がコロナ渦中の自身にとって、あるいは一寺をおあずかりする身にとって、どのような教言として受け止めることができるのか。何事も念仏を申せるようなあり方を求めていたのか。生活の

中に念仏があるのか、念仏の中に生活があるのか。あらためて今までの自身のあり方が問われていることです。

不安という病

新型コロナウイルスに感染することへの不安もさることながら、何よりも感染したことによって社会的制裁をうけるのではないかとという不安の方が、私の中では大きいということに気づかされました。感染された方やその家族への誹謗中傷が加熱しているという報道やインターネットの記事を目にする

たびに、自分が地域の感染者一番目になりたくない、お寺からは感染者を出せないと防衛的になっています。現代はリアルタイムで多くの情報が入り、どこで地域で何人の感染者が出ているということや、それに付随した憶測なども容易く知ることができます。そのせいか、様々な事柄に対して過敏に反応してしまい、不安を増大させていき、物事を正常に判断できなくなっています。加えて、他者に対して監視的・懐疑的・批判的になっていく私がいいます。

親鸞聖人が「源信、『止観』に依つて云わく、魔は煩惱に依つて菩提を妨ぐるなり。鬼は病悪を起こす、命根を奪う『教行信証』化身土巻 聖典三九八頁」という言葉を記

しています。この言葉を現在の自身にひきかけてみると、内に潜む魔は自己の思いによって増大し、多くのことを思い誤り自他ともに傷つけてしまう。そして、内なる鬼は新たな病悪を引き起こし、生きる意欲を奪っていくのである、と。コロナウイルス感染そのものに対する不安より、自身の魔と鬼によって増長された不安という病によって、自身のみならず他の人の生活をも蝕んでいつていることを教えられます。

かつて金子大榮先生は「人間の不安は、人間の理智とともに成長する」(『金子大榮集』上二一九頁)と教示されていました。人は賢くなれば、不安がなくなるわけではない。人間の賢しさが、かえって不安を増大させてしまうのである、と。現代は、人智を集結して様々な分野で発展し、その恩恵によって快適で便利な社会が形成されています。しかし、その快適で便利な暮らしの一方で、思いがけない問題が次々と起こり、解決困難な事態に直面しています。この度のコロナウイルスの世界的拡大は、感染力の強さもさることながら近年のグローバル化の発達が拍車をかけています。もともと、そういう社会が自身と別に形成されているわけではなく、相互の関係の上にあるということも看過できません。不安のもととなっているのは、自身の知をた

のみ、それによって物事を計っていいこうという私たちのあり方であり、そのあり方が今の社会を生みだしているということです。人間の智慧は社会を飛躍的に発展させた一方で、人間の不安を増大させる内なる魔と鬼としてはたらく、自損損他を繰り返していることがわかります。

仏智という宗教的智慧

人間が人智によってのみ生きていくならば、それはあたかも自らの力で自らを持ち上げようとするかのように、行き詰まりが出てきます。人智が必ず行き詰まるということを、仏智という宗教的智慧の照らし出しによって、立ち止まり考えていく必要があると、この度の事態を通して感じました。宗祖が「如来誓願の薬は、よく智愚の毒を滅するなり」(『教行信証』信巻 聖典二二六頁)と確かめられたのは、自身がたのみとする人智にぬぐい去りがたい毒を持っていることを、智慧の念仏によって知らされた実感によるからです。

この度のコロナの問題を通して、たのみとしている人智の危うさと、肥大化していく不安に惑わされている自身の姿を宗祖の言葉を尋ねることによって気づかされたことです。

教務所からのお知らせ

《得度》

二〇二〇年八月四日付

近江第八組 安樂寺 相馬 慶伸

石東組 善徳寺 古庄 響也

二〇二〇年八月七日付

山城第一組 徳正寺 駒井 雅

山城第二組 正願寺 堀川 睦

近江第四組 稱讃寺 今井 純司

近江第四組 浄秀寺 内田 清華

近江第一〇組 願立寺 木村 泰偲

近江第二十六組 浄立寺 畑 毅

〔敬称略〕

《敬弔》

ご生前のご功勞を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

近江第三組 雲藏寺住職 久保 知志

二〇二〇年六月二十九日 七十二歳

近江第三組 法林寺前住職 藤岡 文雄

二〇二〇年七月十二日 九十三歳

〔敬称略〕

《経常費の早期完納について》

経常費の早期完納締切期日は二〇二〇年九月三十日（水）です。

なお、本廟部（参拝接待所）で相統講金（真宗本廟収骨）、読経志（永代経・申経）等を直接納金された場合は、各寺の御依頼額には算入されません。予め教務所を通してお手続きください。

郵便振替による送金の場合の口座番号・加入者名は左記の通りです。

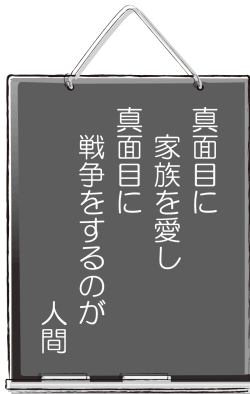
・口座番号 009601818967

・加入者名 真宗大谷派京都教務所

※払込用紙（振込料教務所負担）をご希望の方は、教務所までお申し出ください。

《教務所員の異動について》

八月一日付で海雄二次長が宗務所総務部次長として異動となり、小代亨次長（前組織部次長）が着任いたしました。また、同日付で梅溪真人駐在教導が奥羽教区駐在教導として異動となり、佐々木大駐在教導（前金沢教区駐在教導）が着任いたしました。



※毎月掲載しております、「ことば」は、教区駐在教導が担当しています。

駐在日記

3回目の家族旅行で10年ぶりに京都へ戻ってきた。将来、愛媛県宇和島市にある寺に身を据え、家族で四国を出られなくなるだろう…そんな杞憂に、「転勤」をちょっと長い「旅行」なのだといつか考えるようになった▼駐在教導として、これまでの経由地は四国教区（香川県）7年、金沢教区（石川県）3年。京都には学生時分よりご縁をいただき、本山同朋会館常勤補導として4年間勤めあげるまで約17年間過ごしてきた。きっと懐かしいはずなのだが、年齢に病を重ねながら寺を守る両親のことや、家族をとらなつての新生活に、10年前とは違った不安が募る▼いつかそうなると頭ではわかっている。しかし、実際に自分の身に起こると「突然」に感じ、漠然とした不安に苛まれる。現実になると即座に受け入れがたい。捨て難い、いろいろなものを身にたくわえてしまっているようだ▼まずは不安を受け止めよう。漠然としたまま受け入れるのではなく、じっくりと振り返ってみる。人との関わりを通して、家族ともども徐々に不安を歩ませていただいたこと▼別れの辛さは、出遇いの深さ。人との関係性を築きながら親しんできた証を礎として、京都教務所へ、京都教区駐在教導としてつとめていきたい。

（駐在教導 佐々木 大）

真宗大谷派 京都教区 教化広報誌

「教区だより」 特別号 Vol.5

発行人 日野 隆文（真宗大谷派京都教務所長）

発行所 真宗大谷派京都教務所

〒600-8164 京都市下京区花屋町通烏丸西入

Tel : 075 (351) 5260 Fax : 075 (351) 5256

発行日 2020（令和2）年9月1日

メールアドレス : kyoto@higashihonganji.or.jp

真宗大谷派京都教区ホームページ

京都教務所

検索

